

## 第8回国際 TDM 会議

上野 和行\*

近年血中薬物濃度モニタリング (TDM) は広く実施され薬物の適正使用に貢献しています。そして臨床薬理学の発展、また最近の分子生物学の発展に伴い TDM 分野においても理論展開ができるようになり学問として成り立ってきております。TDM の関連学会と考えられる臨床薬理や薬物動態に関する学会は国内外とも非常に活発であり周知のところでもあります。日本における TDM に関する学会活動として日本 TDM 学会が知られており20年以上の歴史を有しています。また国際学会への支援も行っています。

国際 TDM 会議 (International Congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology, ICTDMCT) は隔年に開催される TDM の国際学会であります。第1回が大阪市にて現大阪薬科大学臨床薬理学教室田中一彦教授主催で開催され、今回は数えて8回目になります。今回はスイス・バーゼル市で2003年9月5日から13日までの期間で開催されました。そこで当該会議への参加印象記を以下に紹介させていただきます。

開催地バーゼル市はスイス、フランス、ドイツの三カ国の国境近くに位置し、チューリッヒに次ぐスイス第二の大きさで、交通の要所にある都市です。中心部にライン川が流れ、博物館や多くのモニュメントがあり、またその間を路面電車が走り大変趣のある町であります。学会会場は市内中心部に近いコンベンションセンターでした。学会内容はシンポジウム8題、ワークショップ12題、口頭およびポスター発表が約200題で熱のこもった討論が交わされました。それ以外にも残念ながら著者は参加できませんでしたが2日間のプレシンポジウム、2日間のポストサテライトが実施さ

れていました。本学会の参加者は臨床における薬物濃度モニタリング関連学会であるためか、企業や病院・研究所で測定法などを専門に開発している化学者、臨床薬理学者やその関連の専門家、薬物動態の専門家や筆者のように病院薬剤師、そして臨床医などいろいろな職種の参加者がいて、演題のほうも本学会の特徴と考えられますが、測定法などの化学的な演題、データの解析法などの数学的な演題、薬物動態関連の演題から症例報告などのように臨床に直結した演題など非常に幅広い内容が発表されてきました。従いまして自分の専門としている関連の報告はもちろん、それ以外の報告に関しても非常に興味深く聴講することができ筆者にとりましては非常に勉強になりました。著者は第2回以外すべての本国際学会に参加していますが、今回の特徴として、シクロスポリン、ミコフェノール酸、シロリムスなどの免疫抑制薬をはじめ臓器移植関連の TDM に関する報告と最近のゲノム科学の進歩が示されているように薬物代謝酵素あるいはトランスポーターなど薬物動態を担う遺伝子に関する報告が増えてきたように思われました。前者に関しては採血時間と効果予測との関係や代謝物をも含めたモニタリングと効果・副作用との関連が報告されており大変興味を持ちました。今後は C2 によるモニタリングの有用性や代謝物濃度との関連が明らかになればより TDM が臓器移植医療に貢献できることと考えます。後者に関しては一部では遺伝子診断が臨床現場で実施されるようになってきましたこともあり、今後は TDM 分野においてもよりいっそうの発展が期待されているところでもあります。一方従来からの測定法に関する報告もより簡易な測定法の開発などの報告や、疾患時における TDM の報告などがあり、今後の TDM の実践に大いに

\*国立循環器病センター薬剤部

参考になりました。

一方夜のワイン&チーズレセプションをはじめ、昼のランチブレイク時間帯においてはポスター会場がちょっとした会話の場となり、非常にアットフォームな雰囲気の中での発表風景が展開されていました。また学会期間中天候もよくランチタイムでは会場内のランチをいただきながらポスター発表を見て回ったりするのもよかったが、天候もよかったため町中へブラッと出て屋台(?)で買ったソーセージを片手に1, 2時間ほど市中を散策することもできて本当にのんびりした時間を過ごすことができました。

日本からの発表は著者らの演題をも含めまして7題でちょっと寂しい気もしますが、すべて内容は直接臨床に結びつく高度な発表でございました。そこで本紙面をお借りしまして著者らの発表を紹介させていただきます。抗不整脈薬アミオダロンと $\beta$ 遮断薬カルベジロールの相互作用に関する研究でございます。アミオダロンは多くの薬物との間で相互作用があることが知られています。特に近年低用量療法の有用性と安全性が報告され使用頻度が高くなってきています。一方カルベジロールは高血圧治療だけでなく、心不全治療に對

して用いられることから使用頻度が高く、また両者の併用頻度が増加してきております。そこで著者らは両薬物の相互作用、特にカルベジロールの薬物動態に与えるアミオダロンの影響について、光学異性体別の検討を行いました。その結果、 $\beta$ 遮断作用のより強いS体のカルベジロールが有意に影響を受けることを見出しました。従って両者の併用によりカルベジロールの血中濃度が上昇し $\beta$ 遮断効果が増強されることに注意しなければならないことが示唆されました。本研究結果は臨床における適正使用に貢献することを確認しております。また本発表時 ICTDMCT の重鎮でありますWalson教授に説明する機会に得られました。お褒めの言葉をいただきまして感動しましたことを付け加えたいと思います。

今回はアメリカ、ケンタッキー州ルイスビルで2005年4月23日から28日にかけて開催されます。多分バーボン片手にTDM談義になるのではと思っております。是非また参加したいと思います。かつ発表もしなければと考えております。TDMに興味をお持ちの先生方、ぜひ今回の国際TDM会議への参加をお勧めいたします。